あしたねの「せんそうのおはなし」をきく会 2015.8.9.

とても生き生き!!

"小学生でも理解できる" "子どもの目線で戦争について考える"
そのことをテーマにした戦争体験者のお話会を、今年も開きました。
今年は佐久市の佐々木都子(しげやこ)さんに来ていただきました。
旅館「清隼館」で女将をされつつ様々な活動をされている都子さん。今年87歳とは思えないくらい凛とされた素適な方。

今回は佐久代田9条の会も共催して下さり、大人28名、幼児7名、小中学生11名、合計46名も集う賑やかな会となりました。

♡ 絵本の読み聞かせ「かみなり」(甲府空襲の話)「へいわってすてきだね」(小1の沖縄の男の子が書いた言葉)

♡ お話

16歳の時に学徒動員で名古屋の兵器工場へ

野沢高等女学校(今の野沢南高等学校)にいた時、学校の命令で、中込駅より100人、岩村田駅より100人、合計200人軍用列車に乗って名古屋へ。列車の窓は外が見えないよう、鎧戸で閉められていて、生きて帰れないと思っていたが、私が頑張らなくては日本は負けると思っていた。

お米も一粒でも残さず食べたかった…

ご飯は本当に少しで、お味噌汁に大根がこかれ。赤いお米を赤飯と思ったらコウリャン(高きび)だった。噛んでも噛んでも噛みくだけなかった。サツマイモを4kg5円(当時の月給相当)で買って、蒸かしてもらうと半分程とられるので、工場の金米片でそれを屋根に干し、生のまま食べた。
実家から煎り大豆が送られると最初は分け合って食べたが最後は分ける余裕なく押しいれで音が聞こえないようしゃぶって飲みこんだ。シラミが体中たかったが、それをつぶすと赤かったが、最後は茶色いような血になった。栄養状態が悪かったのでは…。

訳も分からず頑張ってはいけないと思った。

戦争が終わって、何も考えず訳も分からず頑張ってはいけなかったと強く思った。
戦争は辛かったと事を片づけてしまうのではなく、だったらこれからどうしたらいいのか考えて私はやっていきたい。やりたいことを、やれることを、私にしかできないことをやろうよ!と。
学徒動員のことは私にしか分からないから伝えたいと思い本をつくりました。(「十六歳の兵器工場」)

「幸せ」という字は、十一二十(プラスマイナスイコールマイナスプラス)でできている。逆さにしても同じ。辛いことばかりでなくいいこともある。また、私は自分の幸せは、相手あっての幸せだと思います。そのことを心におきながら、活動していきたい。

♡ 質問コーナー

Q. 30代女性「都子さんは戦争に対して恨みとかなかったんですか?」

A. 「それが恨まなかったんです。戦争が終わって誰かを責めるのではなく、何故自分は気づけなかったのかと。間違っていたんだな、ならどうする?と考えて5年ごとに、地域の方に戦争体験者の言葉を録を書いてもらい、編集して本を自費出版しています。自分なりの贖罪と思って。また、毎年8月15日に、南相木村の不戦の像(出征する父親を見送る母子像)の前で集会を開いています。自分のできることこれっぽっちだけでやらなくてはと思って。」

Q. 小3男子「男の人はどうしていなかったの?」

A. 「戦地に兵隊で連れて行かれちゃったのよ。家族で誰か行ってない?」

小3男子のおばあちゃん「この子のひいおじいちゃんは、もうとくなりましたが、船の人間魚雷の特攻隊員でした。運よく直前で終戦になり生き延びました。」

参加者「戦時中、最後にとられた作戦で、特攻隊は飛行機、人間魚雷は船。モーターボートみたいな船に爆弾をのせて、敵の軍艦を沈めるためにぶつかっていくもので必ず死にました。特攻隊は6千機も飛んでみんなとくなっていった。」

「人間魚雷の模型が佐久の貞祥寺(ていしょうじ)にあります。この辺りでは人間魚雷の練習を野辺山でやっていたそうです。戦争は自分も死ぬけど、相手を殺すということで本当にいけないと思います。誰かに攻められた時どうするんだと言われると私も分かりませんが、私は自分をつくらなくてはいけないと思っています。自分の考えをしっかり持っていくことが大事だと思います。」

編集後記 今回お話会の内容を伝えたくてまとめてみましたが、ことば一つ一つがとても深くて、私の心の中にしみこんできます。あしたねの活動にも力強い励みをいただきました。女性の自立支援、悩み相談の活動など精力的な都子さん。本当にありがとうございました!